

# 夜の素顔

2008(平成20)年2月3日鑑賞(千日前国際シネマ)

★★★



監督=吉村公三郎/脚本=新藤兼人/出演=京マチ子/若尾文子/細川ちか子/根上淳/菅原謙二/柳永二郎/坂東蓑助/浪花千栄子(角川映画配給/1958年日本映画/121分)

## 第3章

内容の面白さは男女を問わず

……京マチ子扮する主人公朱実が日本舞踊の家元「菊陰流」を創設できたのは、実力もさることながら色仕掛けのおかげ……？ そんな話は世の中にゴロゴロあるはずだが、ここまで露骨に描かれると、ウブな私(?)は、多少女性不信に……？ 南方の島への慰問から始まるシーンには半世紀前の映画だと実感させられるが、それ以上に「因果応報」「歴史はくり返す」の格言を肝に銘じなければ……。

### 『女の勲章』は洋裁、『夜の素顔』は日本舞踊

千日前国際シネマで開催されている「京マチ子名作映画まつり」で1月20日に観た『女の勲章』(61年)は、洋裁店を次々と拡大していく中で翻弄されていく京マチ子演ずる大庭式子の姿を描いたもの。もっとも、ここで式子が見せた事業欲は受け身で、すべては田宮二郎演ずる八代銀四郎の野望に踊らされたものだったから、いわば式子は被害者……？

これに対して『夜の素顔』は、日本舞踊に命を懸けた京マチ子扮する朱実が、「女の武器」を駆使しながらおのれの野望を積極的に追求し実現していく映画だが、そこには女の恐ろしさが如実に……。

### 1942年 vs. 1948年

1958年製作のこの映画の冒頭シーンは、1942年の南方の島。帝国海軍がはじめて大損害を受けたミッドウェー海戦は1942年6月5日～7日だが、このシーンはどうもその後らしい。なぜなら、連戦連勝中の時期であれば、南方航空隊の基地がいきな

りアメリカ軍によって爆撃されることなどないはずだから。

主人公朱実（京マチ子）は軍の慰問のために戦地を駆け回っている一座のヒロイン。そんな場合ラッキーなのは、慰問係を担当することになった士官。なぜなら、女っ気が全然ない軍務と違って、慰問係ならすぐ目の前で魅力的な女性を拜むことができるのだから。そんなラッキーな男が若林中尉（根上淳）だったが、公演中に爆撃を受け、2人はジャングルの奥深くで結ばれることに……。

こんなラッキーなこともあるものだと感心していると、舞台は一変し、敗戦後の1948年の日本。今、必死に朱実が弟子入りを頼んでいるのは、小村流の家元小村志乃（細川ちか子）。朱実にとって日本舞踊しか生きていく道はない、日本舞踊はこれから伸びていくと必死のアピールだが、日本舞踊に未来はない、小村流は店じまいすると決心している志乃は弟子入りを拒否。しかし、朱実はそんなことで諦めるような玉ではなかったようで、ヒラリー・クリントンと同じように（？）女の武器である涙を使ったり、日本舞踊の将来を熱っぽく語ったりとすごいアピール。

しかして、その6年後。朱実は志乃の片腕として、大成長した小村流を取り仕切っていたからビックリ！

### 師匠のため……？ それとも自分のため……？

私は日本舞踊の家元制度やその収入のあり方は全然知らないが、この映画を観ていると結構大変らしい。それに対し、歌舞伎の世界はその価値が確立しているから、日本舞踊の家元とは全然レベルが違うよう。したがって、志乃の夢は歌舞伎俳優の中村十次郎（坂東蓑助）と一緒に踊ることだが、それはあくまで夢。ところが、何ゴトにも行動力のある朱実のある「仕掛け」によって見事にそれが実現することに。それは、もちろん色仕掛け！

朱実がそこまでの犠牲を払って（？）まで、志乃と十次郎との共演を実現させたのは、師匠のため……？ それとも自分のため……？ つまり、志乃が老醜、古色蒼然と叩かれたのに対し、朱実は新鮮澁刺と絶賛されることは、朱実の計算のうち……？

機は熟したとみた朱実は、今度は志乃のパトロンとなっている日本舞踊の愛好者猪倉（柳永二郎）に色仕掛けで迫り、その後ろ楯を得て、見事菊陰流を創設することに。その手際はお見事としか言いようがないが、これに対して志乃が「飼い犬に手をかまれた」と怒り心頭に発したのは当然。もっとも、ここまでくると朱実の居直りは大し

たもので、そんな志乃の怒りなどどこ吹く風。

しかし、因果応報とはよく言ったもの。そんな非道なことをやっていれば、いつか自分の身に跳ね返ってくるのでは……？

### 対照的な雨宮の登場と若林の登場！

今やトントン拍子に成長している菊陰流の朱実の前に2人の男が登場する。1人は、朱実の幼なじみで朱実との結婚を望んでいた男雨宮（菅原謙二）。これが結構いい男なのだが、なぜか朱実は雨宮には全然興味を示さず迷惑顔……？

もう1人は若林。舞踊研究所の落成披露に贈られた花輪の1つに若林の名前があったことを知った朱実は、心底からうれしそう。あのジャングル奥深くでの抱擁がよほどよかったらしい……？ 1人安アパートで生活している若林は、肉体こそたくましいものの生活力は全然なさそうだから、なぜ朱実がそんな若林と結婚しようとまで思いつめたのかはナゾ。それはやはり、「あの方面」がよほど良かったためとしか考えられないが……？

そんなワケで、今や朱実は若林と二人三脚で、「封建的な家元制度に反逆」というキャッチフレーズを展開し次々と新機軸を打ち出していったが、さてその行方は……？

### 浪花千栄子がすごい役で登場！

この映画には、私にはなつかしい顔の浪花千栄子が登場し、大阪弁丸出しのいやらしい女絹江を演じている。

やけに馴れ馴れしい口調で朱実の自宅を訪れてきた絹江は、朱実が留守だと聞くと、「ほな、待たせてもらいまっさ！」と玄關に座り込んだから、朱実の弟子たちはビックリ。朱実はたしかにいやらしい女だが、日本舞踊の資質があったことはたしかなよう。しかし、それは一体いつ、どこで身につけたもの……？ 戦争中に慰問団として派遣されていた朱実の過去はそれまで一切明らかにされていなかったが、ひょっとして、この馴れ馴れしいお婆さんは朱実の母親……？ もしそうだとすると、朱実の過去にはどんな汚点が……？ また、絹江の狙いは一体ナニ……？

この2人がみせるすごいバトルは、この映画の1つのハイライト……。

## 叛逆の芽は身内に……

一代で何らかの事業を築くのは大変だが、それを維持していくのはもっと大変。事業のオーナーにとって敵があちこちにゴロゴロいることはよくわかっているし、その対処法は常々検討しているもの。しかし「灯台もと暗し」で、実は叛逆の芽が身内にあるのはよくある話。『女の勲章』に京マチ子の一番弟子役として出演していた若尾文子は、美人だがいかにもいじわるそうな役がお似合い……？ しかして、『夜の素顔』では若尾文子が朱実の一番弟子比佐子役で登場し、いかにも忠実に朱実の片腕として頑張っていたが……。

室町時代の中期「応仁の乱」が起こったのは、それまでの武家社会の価値観が大きく転換し、「下剋上」が当たり前になったため……？ そうすると、朱実だって下剋上によって菊陰流を創立したのだから、朱実の一番弟子の比佐子が下剋上を企んだとしても、それはある意味当然。そのうえ、朱実が結婚相手として選んだ若林は、①師匠と弟子の関係を、教師と生徒に置き換え、②月謝制度を公演という手に置き換えるというユニークな提案をした点ではアイデアマンだったが、実はカネと女にだらしない男だったよう。

すると、もし比佐子がこの若林とつるんだら……？ 色好みの若林にしてみれば、朱実よりも若くてピチピチした比佐子の方がいいに決まってるから、その可能性は大。するとその先は……？

## 『日本の夜明け』の上演は……？

若林の口車に乗って次々と新機軸を打ち出していった朱実だったが、菊陰流の台所は火の車だったらしい。しかし今、朱実は日本舞踊とバレエを融合させた革命的な舞踊劇『日本の夜明け』の上演にすべてを賭けていた。資金集めから、作曲依頼、そして弟子たちの稽古まで今、必死の活動中。若林との関係が暴露された一番弟子の比佐子も、「これまでのことは水に流して、公演成功のために頑張ろうね」という朱実の声を素直に聞きながら(?) 頑張っていた。

そして今日は、その初演の日。バイオリンやトランペット等を中心とした洋楽と、笛、太鼓、鼓(つづみ)を中心とした和楽を合体させた大オーケストラの演奏は圧巻！ そして、主役を張っている朱実にとって、今日は待ち望んだ晴れの舞台。とこ

ろが、その中で起きた大ハプニングとは……？

1958年の古い映画だから思い切りネタばらしをしまえば、そのハプニングとは公演中に朱実がバツリと倒れてしまったこと。これには観客はビックリ。「しばらくお席でお待ち下さい」とのアナウンスが流されたが、楽屋の中は大混乱。そこに現れたのが医者の雨宮だが、雨宮の応急処置の甲斐もなく朱実はそのまま息を引きとってしまうことに。

この映画の面白いところ（いやらしいところ？）は、朱実が突然死亡してしまうというハプニングの中でウソ涙を流していた比佐子が、取材を求めてきた新聞記者たちに対して言い放った次の言葉。すなわちそれは、「私が立派に菊陰流の後を継いで参ります」というものだった。まさに「因果応報」「歴史はくり返す」を地でいく結果にしばし啞然。一体朱実の人生って何だったの……？ と大いに疑問に思い、かつ朱実ってホントにかわいそうな女、と私は思ってしまったが……。

2008(平成20)年2月6日記